

瓜裂清水 復活

新しい湧水口を探して導水

しゃくによ

伝説によると「六百数十年前に井波瑞泉寺の開祖、綽如上人が庄川で休憩された折、上人の乗った馬がひずりめで地面を踏み抜くと突然陥没してそこから清水が湧き出した。さっそく里人が献上した瓜をその水で冷やしたところ、あまりの冷たさに瓜が裂けたことから、綽如上人が「瓜裂清水」と名付けた」といわれている。

10年ほど前から湧水量が年々減り「霊水」の枯渇の危機にあったが、令和2年4月に住民の手で原因を突き止めその対策をして、昔の水量を復活させた。この水の水質は、硬度 36・pH6.6 である。(岡岸 記)



7月5日 撮影



井戸枠の内側。馬蹄形に加工された金屋石が湧水口を覆うように置かれている。

7月5日(日)取材に訪れた日もきれいに清掃され、おいしい清水がこんこんと湧き出し手前の池に流れ出ていた。全国名水百選の名に恥じない姿を確認し、ぜひ NPO 会員と訪れたいと思った。水量復旧に携わられた関係者に敬意を表するとともにこの清水が子々孫々に受け継がれていくことを切に願った。(石川 記)

東山見地区自治振興会 金屋石を語る会

令和元年七月十四日

瓜裂清水は本願寺五世綽如上人が、この地でご休憩され、献上された瓜が清水の冷たさで割れたとされていることに起因している。ここには金屋石で作った石造物が多くある。金屋石は砺波市庄川町から産出される良質の緑色凝灰岩(グリーンタフ)である。美しく弾力性があり加工しやすく、江戸時代末期から昭和四十年頃にかけて採掘され、金沢城の礎石や辰巳用水の石管、黒部市の十二貫用水の石管にも使用されている。瓜裂清水の湧水口には井戸枠を横し、模様を施した造形物がある。また中央には古い合掌の地藏菩薩坐像がある。南側面には金屋石製の不動明王像がある。側面には「明治三十二年一月森川栄次郎建立」と銘がある。森川栄次郎の作で、一生の間に一千体の石仏を彫ったとされる明治の名石工である。これは憤怒の姿で上市町の大岩日石寺の摩崖仏を模したものであり、水の神様とされている。この他に、金屋石製の聖観音、勢至菩薩の石仏が二体安置されている。階段から湧水口に向かう敷石にも金屋石が使用されている。昔、金屋石採掘で賑わった岩黒地区を偲び、この地区の誇りである金屋石を長く保存していきたい。

新聞記事のスクリーンショット。見出しは「枯渇危機の 瓜裂清水 復活」で、サブタイトルは「新たな湧水口発見」。記事内容は、10年ほど前から湧水量が減った「霊水」の枯渇の危機にあった全国名水百選の砺波市庄川町金屋の「瓜裂清水」が、再生を目指す住民らの調査と新たな湧水口発見により4月に水量を回復させた。写真には、調査の様子や湧水口の発見現場が写っている。

池の横に設置されている立て看板↓